紛争転換の方法 SABONA の学校教育における一実践
―より良い関係性を構築するための取り組み

室 井 美 稚 子
（清泉女学院大学人間学部教授）

はじめに

Peaceには平和と平穏のみならず友好関係の意味がある。学校教育の場ではいじめだけでなく体罰も絶えず、社会ではヘイトスピーチが後をたたず、子供も大人もPeacefulな友好関係を模索しながらも抜け道が見いだせない昨今である。目の前にあるこれらの暴力的な状態を少しでも打開するのに何か方策がないかと求める人は多いだろうし、特に教育関係者にとっては焦眉の急と言えよう。

ここに紹介するのは、「平和学の祖」と呼ばれるヨハン・ガルトゥングによって考案された『SABONA』または『SABONA（サボナ）マット教育』（「SABONAの会」命名）である。SABONAは南アフリカのズールー語でI see you. つまり、「私はあなたを見守っています」を意味する同博士のTranscend Approachを下敷きにしてわかりやすく編まれた紛争転換（problem solving ではなくconflict transformation）のための手法である。ガルトゥングの50年以上に渡る世界のミディエイター・調停者としての手法が凝縮さており、特に若者を対象としていると言えよう。

筆者はトランセンド研究会に属しており、2009年度から2011年度までの３年間、科研（萌芽研究）でこの生まれたての方法を研究する機会を得て、オスローにて日本におけるファシリテーションと書籍を翻訳する許諾をガルトゥングより得た。また、2010年の「SABONAの会準備会」を経て、仲間と共に2011年から「SABONAの会」の世話人の一人である。本会はその普及と日本的なアプローチの開発を目指して活動しているが、グループとしては主に大阪府下の小学校や高校などで先生方を対象としたワークショップを行い普及に努めている。しかしながら、本稿は筆者が住んでいる長野県における個人による高校生や大学生に向けて行った講演やワークショップの実践報告である。

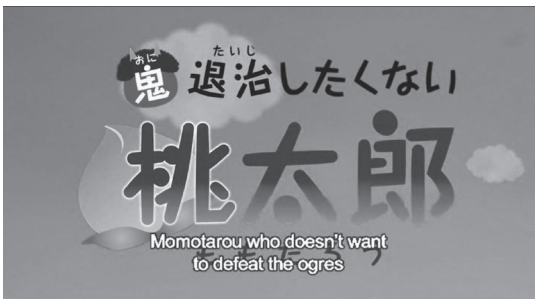
１．ワークショップの展開

高校生や大学生に対して５年間で行った講演やワークショップは年間平均２～７回くらいであるが、2012年８月には地元紙（信濃毎日新聞）にも紹介され、小学校や高校からの依頼は少しではあるが増えている。また、高部優子氏によって制作された『鬼退治したくない桃太郎』（2012年２月）など２本の短編アニメ（英語・中国語・韓国語・スペイン語・日本語字幕付き）を活用することによって、耳慣れない平和学やSABONAの概念が飛躍的にわかりやすくなったことが大いに役立っている。

学校の先生方へのワークショップとは異なり、与えられる時間は授業の１コマか長くて２コマであり多様な生徒たちであるので参加型の部分は最小限しか入れられず説明するだけのこともあるが、以下にその一般的なアプローチを紹介する。

①「平和学」「平和の文化」って？

まず、学生・生徒に自分たちの知っている「桃太郎」のお話を思い起こさせてからアニメ『鬼退治したくない桃太郎』をいきなり見せる。通常は時間がないので話し合わないが、参加者が知らない者同士の場合は自己紹介をかねて話しあってもらう。このアニメ（約10分）は、鬼を退治するのではなくて話し合いの場をもって理解し合い、最後には互いに助け合う構成で、作者の言いたいことについてペアやグループで考えさせる。小学校から大学まで、また台湾（オリジナルの桃



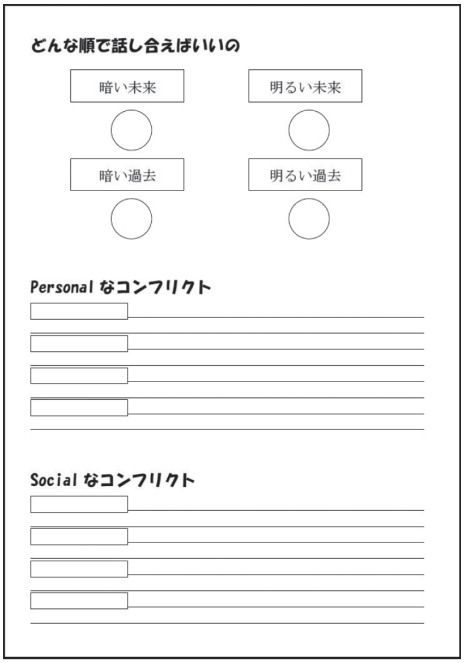
太郎の話はモモタロウの名で普及していることを発見）の大学生にも試みたが、例外なく意図をすぐに感じ取ってくれた。

また展開として、翌週などに時間がとれれば、自分たちが子供の頃から馴染んでいる物語を見直して平和的にリメイクさせるワークは大変に興味深いストーリーを生む。短期留学してきた台湾の高雄の大学生グループのひとつは、『三匹の子ブタ』の話を選んで競争的ではなく、より良い住居を造るための助け合いの実験とするストーリーに変えて、「平和の文化」の意味を理解してくれたことが伝わった。残念ながら、たいていの場合はワンショットなのでこの展開は望めないのが辛いところであるが、いずれは段階的なシラバスを作成していきたい。

平和的な発想を求めて学ぶことが平和学であり、「平和の文化」とはこのような発想の延長線上に花開く文化である点をわかってもらいたいと考えている。

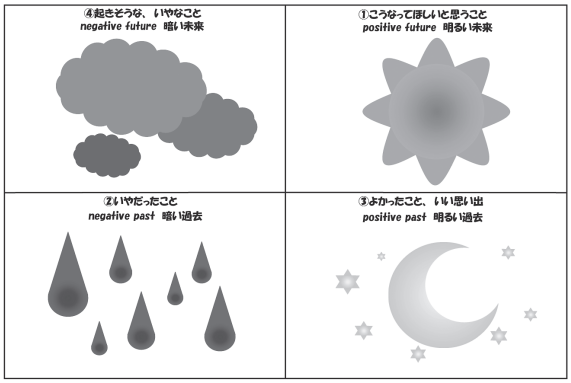
②ケンカしているとき何から話したらいいかな？

それでは、コンフリクトがあること、ケンカをすることは悪いことであろうか。否である。ケンカをすることはあってはいけない悪いことではなく、極めて自然な人間の営みである点を強調する必要がある。コンフリクト・もめ事・ケンカの存在を認めて、問題を顕在化させて「明るい未来」を共に探ってこそ、将来よりよい状態を創り出せる可能性が生じるからである。



ワークシート（ア）

ここで４つの象限のイラストを見せる。まだ順番を表す数字が入っていないものをまず見せて、相手が大変怒っている時、「明るいpositive」もしくは「暗いnegative」と「未来future」もしくは「過去past」の組み合わせのうち、どれから話せばよいかを考えさせる。ワークシート（ア）を用意して各自で予想させる場合もある。



ワークシート（イ）

ガルトゥングの推奨は、ワークシート（イ）（本稿ではコンセプトが想起しやすいように、実際に教室で使用するための学生によるイラスト入りシートを掲載）にある順番であるが、ここで導入の初期の頃は誤解を招くことが多かった。相手が相当怒っているから、まず「明るい未来」のことから話さないと対話のテーブルについてもらえないからここから始めるのであるが、最後が「暗い未来」で終わることに違和感が出がだされることが多い。また４番目が最後という捉え方にどうしてもなってしまうことがあった。ファシリテーターが、何回もこのマットまたはシート上を行き来するとの説明を十分に行わずに、「暗い未来」にならないように「これからどうすればよいか」を考えることが肝要である点の押さえが足りなかった。

つまり、必ずしもこの順に動く必要はなく、大切なのは関係性が悪いときに忘れがちな「明るい過去」を思い出す点もある。相手に対する怒りで心が占められると良かった過去が消えたかのようになってしまう。ここにこの４つを意識化するポイントがある。ある小学校でワークショップをしての女子（じょし）の感想に「今友だちとケンカしているけれど、今晩寝るときに楽しかったことを思い出そうと思いました」というコメントをもらった。コンフリクトにある友だちとの関係が好転してくれることを祈りたい。

注意したいのは、この「４つのどこから話したら良いか」に焦点を当てすぎると単なる話す順番のスキルと捉えられてしまい、SABONAの全体のコンセプト

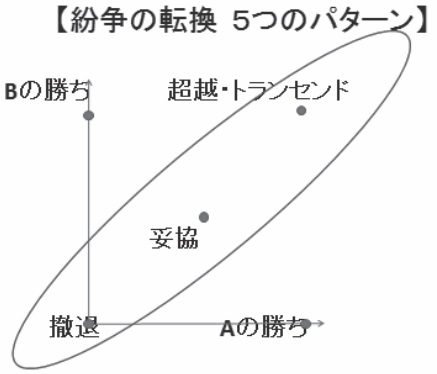
が矮小化されてしまうことである。ワークにじっくりと時間がかけられないので、誤解が生じやすい。この４つの象限の動きは、誰が、または誰と誰が行うかについてもしっかりと説明しなければならない。時にはこの４つを当事者一人で、またはミディエーター（学校では多くの場合は教員）と当事者が２人で、その後に納得できれば当事者同士で、この４つの象限をあちこち動き回り「明るい未来」を創るにはどうすれば良いかを互いに話し合うのである。とにかく、順番にこだわることなく、「暗い過去」をしっかり互いに明瞭にしながらも「明るい過去」にも目を向けて、この先におこってしまうかも知れない「暗い未来」ではなく、こうあって欲しい「明るい未来」にする術を考えるのである。この術については具体的に③で扱う。

余談であるが、ガルトゥングは日本における問題は「コンフリクトが存在すること自体を認めたくない」風土にあるのではないかと指摘した。まさしくその通りで、この点をうまく整理して納得する形で提示することがミディエイターには求められる点に独特の難しさである。

このワーク（ワークシート〈ア〉の後半を使用）としては高校生や大学生には、個人的な問題だけでなく、社会的な問題の２本立てで考えさせたい。これはコンフリクトをミクロ・メゾとマクロ・メガの４段階に分ける発想から来ているが、SABONAがどの段階のコンフリクトにも応用できることを示したいことと、生徒や学生に社会的な目を養って欲しいからでもある。社会問題のワークのテーマ設定を求めると近年はエネルギー問題が出されることが多く関心の高さが伺える。

③「ぶっ飛びの発想」とは何？

「暗い未来」ではなく「明るい未来」を創る術については、定番のオレンジのワークを行う。１つのオレンジを２人が欲しい場合、どのように分けるか・シェアするか、を問うのである。たいてい半分ずつにする方法（妥協）がこと細かく提案され、それと前後してジュースにするとかマーマレードにするなどの意見が出される。中には争わないであげる（いずれかの勝ち）とかお母さんが隠すとか当面の争いを回避する意見（撤退）も出てくる。じゃんけんで決めるもよく出る案（いずれかの勝ち）であるが、そこではそれぞれの必要度は問題にされていない。とにかくどんどん出してもらうことが大切で、多くの人間がいると多様な意見が出ることを実感してもらいつつ、オレンジを温泉に浮かべて香りをシェアするなどの例を挙げ、より創造的な答え（超越・トランセンド）を引き出す。筆者の経験では大人の方が発想が煮詰まり、若者の方が面白く「ぶっ飛びの発想」（Transcend超越の室井によるワークのための訳語）が出てくることが多い。例えば、そのオレンジの種を植えて増やして云々という具合である。このような発想は、図にすると下記のようになる。これをSABONAの元のアプローチであるトランセンド・アプローチでは超越点（Transcend）と呼んで、意識的に創造力を高めないとなかなか出てこない発想であるのでトレーニングが必要であると考える。例えば、このオレンジが島だと考えるとどうだろう。どのようにすれば、暴力によらない創造的な発想で複数の国家間で平和的に有効活用ができるであろうか。



これらの５点のコンセプトをアニメ『HAPPYになる５つの方法』（約７分）では実にわかりやすく教えてくれるので、各点を説明してから上映するのが最近の講演やワークショップの着地点としている。アニメの設定は小学校で、上演する劇を決めようとしている子供たちの学級会の様子である。それぞれ違う物語を演じたい２つのグループがあり、なかなか合意を得られない。どちらも譲らない中、もう止めようという意見や半分ずつ上演しようという意見まで出てくる。さて、どう解決するか。「ぶっ飛びの発想」Transcendはあるのか。それぞれの劇のテーマを生かした新たな劇を自分たちで創ることが提案されるのである。

コンフリクトが劇で何をするかといったような事ではなく、友だちとのケンカの場合はその内容に応じてプロジェクト的な活動を行うことも推奨される。時には撤退してしばらくは冷却期間をおくことも同様に有効な方法ではあるが、本当の解決とはならない場合が多いようであることも言い添える。また、何よりコンフリクトの原因を分析することも大切であり、

SABONAの７つのツール（後述）についても若干触れるが時間の制限で、十分に説明しきれないのが辛いところである。

３．ワークショップの反応

以上のような①②③のプロセスでSABONAを授業の１コマか２コマで児童・生徒・学生に伝えている。もっとじっくりと説明したり、ワークを行って定着を図りたいが、与えられた時間内で最大限に伝えるにはアニメの存在が今では不可欠である。

平和の文化を推進するような絵本の必要性、つまり子供の頃から異なる相手と出会ったときに退治しようとするのではない発想力に触れること、また単なる問題解決ではない創造的なコンフリクトの転換の仕方を身につけること、そして自分もみんなもハッピーになれる世の中を創る推進力になること、これらの大切さをSABONAを通じて伝えたいと講演やワークショップを行ってきた。

以下に、2013年に行った参加型の講演に対する長野県内の高校２年生のコメントを掲載する。短時間でもこれだけの理解と関心を得られるなら、平和学についてもっと体系的に学んでもらえれば、どれほどの効果があるだろうかと考えずにはいられない。

・平和学入門というタイトルで、難しそうだと思っていたけどお話がおもしろくて、平和について柔軟に考えられた。アニメが分かりやすかった。
・“自分、自分”じゃなくて、“相手”はどんなことを思っているのかを考えていくことで、世界平和、人と人とが繋がりあえること、繋がりあうことを考えていくのが大切だなと思いました。じゃあ考えられる人になるにはどうしていけばいいか、吸収していけるようになりたいです。
・今も色々な争いや問題があるということは、分かち合えず、そして分かり合えていないのだと思います。国と国との問題も、こうやってなくなるといいなと思いました。
・今日、この講演を聴いて、もし領土問題などだったら、やっぱり難しいかなと思いました。でもクラスとかだったら、話し合いとかで解決できるのかなと思いました。
・私も部活やクラスで話し合いをする場面が多くあるので、今日のこの講演や内容はとても興味を持てました。自分と違う意見の人が敵というわけではなく、お互いに納得できる意見を出すことが大切だと思いました。
・放棄するのは簡単だからさ、みんなで考えよう。

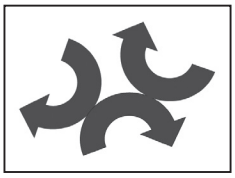
４．SABONAの７つのツールの概略

SABONAは日本では、わかりやすくするために「SABONAマット教育」とネーミングすることがある。それはノルウェーなどでは人が乗れるような大きさのマット（約150cm四方）で前出の「４つの象限の図」と「紛争転換の５つの点」をマットの裏表に配しているからである。それに実際に乗るのである。

日本の「SABONAの会」では、この国での教室環境（クラスの人数）や人々のメンタリティー（大勢の前であまり心情や意見を言いたがらない）を勘案して、ペアやグループでの練習のワークに重点を置いた結果、Ａ３版のラミネート用紙上で各人の駒を動かして少人数で話すか、ワークシートに先ず書くこととした。

いずれにせよ短い講演やワークショップでは、SABONA（Transcend University Press）の「７つのツール」のうち、この２つが強調されてしまいスキル的に捉えられるのは残念である。ここでは７つのコンセプトを簡潔に紹介すると共に、ワークショップでの触れ方を併記する。

Ｉ）コンフリクトの定義－相容れない対立

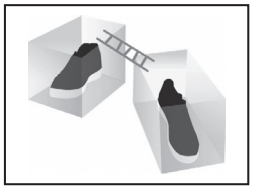


SABONAではコンフリクトを相容れない対立と捉えるが、相容れないのは当事者どうしではなく、あくまでも相容れない目標として考える。

また、３つの別々の方向の図から類推できるように当事者は２人とは限らない点をおさえさせたい意図がある。教員のためのワークショップでは、この当事者の１人がしばしば教員であることも指摘することは重

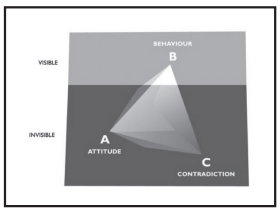
要である。

Ⅱ）2つの視点：手段ー目的



二足の靴は、手段と目的を表している。人はゴールを達成するためにいろいろな手段を用いるが、時には子どもたちは悪しき手段によって正当な目的を達成しようとするときがある。誤ってとった手段にばかり目をやらないで、目的を考慮する必要性を示している。靴が箱に入っているのは、外からはわかりにくく、その発見には周りの努力が要ることを暗示している。

Ⅲ）ABCの三角形の3つのコーナー



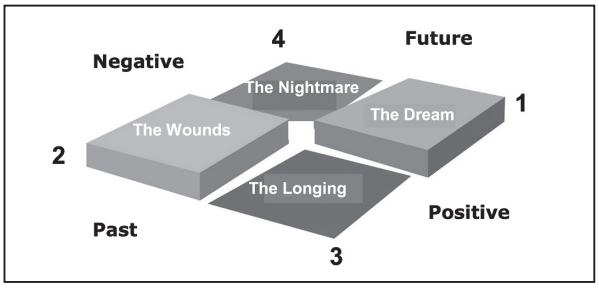
暴力的な現れは氷山の一角であることを表すABCの三角形の頂点は、Attitude（態度）Behavior（行動）Conflict（矛盾、目的の不一致）を示して、それぞれを離しておくことによって、手段と目的の区別をより視覚的にするための図表ある。これに応じる基本なツールは「共感」することにある。

この図はワークではむしろ、表出したコンフリクトを支えている文化的もしくは構造的な問題を探る必要性を述べている。

Ⅳ）マットの4つのフィールド

日本ではSABONAマットと呼んでいるソーティングマットは、当事者を明瞭にして、目的と手段を明確にしながら、コンフリクト・もめ事・ケンカをマッピングする働きをする。

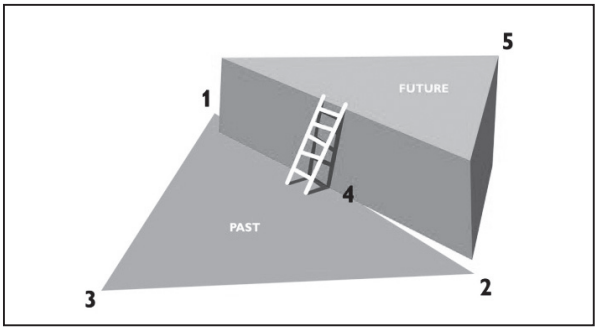
それぞれの象限は、もの事のとらえ方であり、ゴールはその4つ全てを考えることにある。これを行うためには高い成熟度が求められるが、教員だけなく生徒・学生たち自身が自ら行えるようになることが究極の願いである。



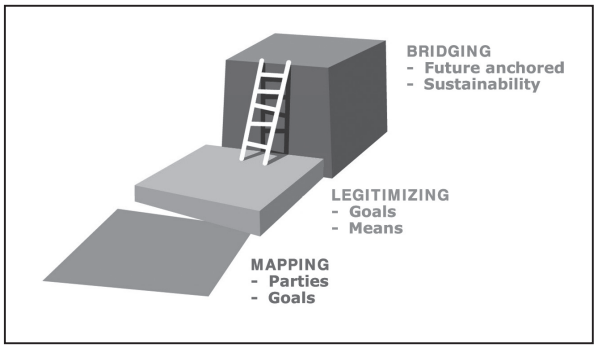
Ⅴ）5つのコンフリクトの結果

上述③の5つの結果は、「異なるタイプの解決策への具体的なアイデアを提供し、その過程で出てくる新たな提案を分類し、分析することに貢献」するとしている。関係する当事者みんなに、「正当なゴールを提供する新しい現実」を生み出すのである。トランセンド・アプローチの対話による創造的な解決法を意識化することが大切である。

ここで、面白いと思うのはノルウェーで積極的にSABONAを実線している小学校では、これらの概念を習得し応用の仕方を学んだ生徒には『5点パズルの探偵』の称号とTシャツをプレゼントし、年少の生徒を支援する仕組みにしていることである。幼稚園も出来たそうで是非、見学したいものである。



Ⅵ）解決のはしご



3つの各段は、マッピング・正当性・ブリッジィングを表す。ハシゴの存在によって、そこに努力が必要であることを示唆しているそうだ。「正当なゴールがはっきりすれば、当事者はゴールとゴールの間に橋をかけ、それを実行可能な未来のビジョンに固定することができる。創造性と対話は必要不可欠のものであり、すべての当事者にとって正当性のある未来のゴールを創造するものだ。」とあり、この解決のハシゴは、トランセンド（超越）「ぶっ飛びの点」の中心にあって「紛争解決のための実用的なツールであり、思考モデルあ

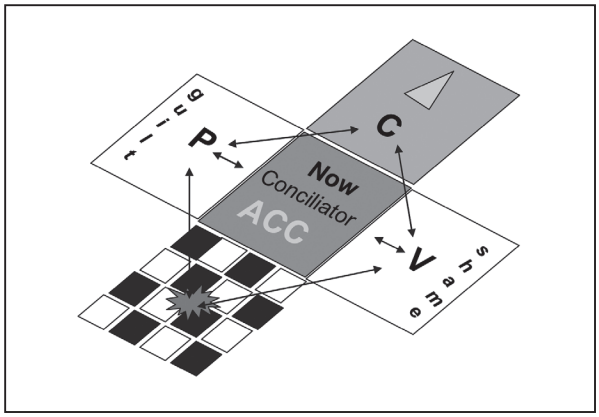
るいはマニュアルでもあり、人間関係に強力な能力を伝えるものでもある。」ので、児童生徒たちがその概念を内在化できるまでは、このツールを使うことは有益である。「生徒たちがトレーニングを受けて経験を積むにしたがって、コンフリクトが起こった場で、自分たちでこの方法を使って考え始める」ことを目指している。しかし、短時間のワークショップでは内在化の必要性を強調するにとどまり、定着を図るまでに至っていない。

Ⅶ）和解のクロス

７番目のツールの「和解のクロス」はもっとも扱いが難しい。本稿では基本的な考えだけをSABONAより以下に部分的に転載する。

- 一人の当事者がすべての罪を背負っていることはめったにない
- 主観性 ― 加害者と犠牲者は状況を異なる視点から見ている
- 誤解は生じるものである
- 対話をソートすることで、生きる力を向上できる
- 和解とは、傷をふさぎ、癒し、繋がった人として前に進むことである

SABONAの発想が我々に内在化されれば、自然と前述の考えは感得されると思われる。そして、「ごめん」「いいよ」という表面的な謝罪ではなく、何かを一緒に行う「ジョイントプロジェクト」の大切さをガルトゥングは説いている。これは最初、不可能のように思われるがクラス運営に日々知恵を絞られてきた先生方にとっては案外に経験のあることではないかとも考えられる。「ジョイントプロジェクト」という言葉を使わなくても、職業的カンで、いろいろな共同の取り組みを行っているケースが多い。ただ、「ジョイントプロジェクト」と意識化することが助けになるであろう。



過去からの絡んだ結び目をほぐし、それに加えて新たに共有しうる明るい未来を創りだすためである。この７つ目のコンセプトは、総合的にSABONAの理解を促すツールであると共にトランセンド理論の集大成であると言えよう。

おわりに

ガルトゥングは「コンフリクトの対処法は、実際の交通状況の中で運転を習得することと似ている。もしみんなが、自分がどのように行動する可能性があるか、あるいはするべきかを全く考えないで、高性能の車を猛スピードで運転していて、車同士が鉢合わせしたときにどうするべきかを習っていなかったとしたら、、、と想像してみると解かるだろう。」と述べ「良い規則としっかりした訓練をつんでいれば、道路上のたくさんの車に十分なスペースが保てて、人々は概ね自分の行きたいところに着ける。たとえ名助手がいたとしても衝突は起こるかも知れないが、なんらかの対応技能があることによる安心感が得られることの方が大きい。従って、『相容れない対立』を扱うための規則が必要である」としており、その方法がこのSABONAである。

これは初等教育だけでなく、中等・高等教育や成人教育の段階でも、導入されることは大変有益であると考え、授業や講演やワークショップを通じて普及を目指してきた。トランセンド・アプローチ自体を含めると10年以上に渡ってささやかに試みてきたが、SABONAと銘打たれ、またアニメの登場をもっていっそう理解しやすく、参加型のワークショップが歓迎される時代を迎えて、より感得しやすい環境が整ってきた。推進母体の「SABONAの会」としても、外からの考えをそのまま導入するのではなく、日本の風土にあった方法も模索してきている。

何とかもっと広く学校教育の場で、一人ひとりのコミュニケーション能力の向上と平行して、グループやクラスとして（ひいてはグローバルな市民として）、和をもってより豊かに生きる術を身につけられるSABONAのトレーニングを段階的に学ぶことができる時間が設けられる日が来ることを切に願う。

【引用文献・参考文献】

Galtung, Johan（2012）*A theory of Conflict - Overcoming Direct Violence* Transcend University Press：Barsel

Galtung, Johan & SABONA Core Group（2011）*SABONA-Searching for Conflict Solutions learning Solving Conflicts*：Oslo

Galtung, Johan（2010）*A theory of Peace-Building Direct-Structural-Cultural Peace* Transcend University Press：Barsel

Galtung, Johan and Jacobsen, Carl. G（2000）*Searching for Peace* Pluto Press：London

Galtung, Johan（1996）Peace by *Peaceful Means* SAGE：London

君島東彦編（2009）『平和を学ぶ人のために』京都：世界思想社

高部優子他（2012）『みんながHAPPYになる方法』東京：平和文化

日本平和学会編（2012）『平和を再定義する』東京：早稲田大学出版部

長谷邦彦他（2010）『SABONAマット教育ガイドブック』京都：「SABONAの会」準備会・「京都YWCAほーぽのぽの会」

長谷邦彦他（2012）『SABONAマット教育ガイドブック（改訂版）』京都：「SABONAの会」

室井美稚子（2011）『コンフリクト転換のためのSABONAの日本における導入―準備段階』長野：「清泉女学院大学人間学部研究紀要」第８号

メリーウイン・アシュフォード（2008）『平和へのアクション101＋２』京都：かもがわ出版

ヨハン・ガルトゥング（2003）『平和を創る発想術』東京：岩波書店

ヨハン・ガルトゥング（2003）『ガルトゥング平和学理論』京都：法律文化社